

## 淀藩に於ける蘭学

杉立義一

はじめに

万治二年以来稲葉家の藩医であった竹岡家を中心とした淀藩<sup>(一、二)</sup>医学の一端を『啓迪』<sup>(三)</sup>誌上に掲載した。それは竹岡家の祖<sup>(四)</sup>玄量が岡本玄治の高弟であり、その推挙によって稲葉家に勤仕した経緯から考えて、竹岡家々学は曲直瀬流後世医学であったと思われる。他面、稲葉家は二・三・四代にわたり老中職をつとめ和蘭商館との交流も深く、その医術・医学に接する機会が多かったため、主に江戸詰の藩医の中には和蘭医学に精通して業績をあげる者もあらわれた。そこで本文では淀藩医学のうち蘭学について考える。

淀の歴史的風土<sup>(六)</sup>と淀城<sup>(七)</sup>

淀は山城盆地の最南端に位置している。北より宇治川、西より淀川、南より木津川が流れきて三川の合流点に当り、更に東には巨椋池を控えていた。従って交通・戦略上の要点として古くより与等津（淀津）として歴史に名を残してきた。室町初期より淀川右岸には細川氏により城が築かれた。史上に名高い淀君の居城としての淀城は天正十七年秀吉によって現在の明教寺の辺に築かれたが、伏見城も淀城も豊臣氏とともに廃城となった。

元和九年皇都守護の目的をもって、幕府は掛川城主松平定綱に命じて淀に新城を築かせた。その場所は現在京阪電車淀

駅前には城跡公園として残る場所である。松平定綱は家臣成瀬李右衛門を平戸に派遣して和蘭流築城術を学ばせて採用し、寛政二年に完成をみた。工法上の特徴として、(一)城の鉄門をポルトでしめた。(二)土居はコンクリートで固めた。(三)堀は普通の薬研堀でなく障子堀と称する逆アーチ形である。(四)各曲輪の枳形は「くいちがい虎口」を採用。等といわれるが、昨年来天守台の発掘調査が行われているが、天守閣には深さ二・五米の地下室があり、また四周に石で作った排水溝があったことが判明した。

松平氏のあと永井氏・石川氏・松平氏と城主は変わり、享保八年五月稲葉正知が入部して幕末まで淀を支配した。稲葉氏以前の領主は在淀期間も短かくとくに語るべき資料もない。従ってここでいう淀藩の蘭学とは正知以前の正勝・正則の時代をも含めた稲葉家を中心とした蘭学の消長をさす。

## 一 淀藩主稲葉家

稲葉家<sup>(八)</sup>はもと美濃国の豪族であった。その略系譜を示す。(『寛政重修諸家譜』より)

1 正成 — 2 正勝 — 3 正則 — 4 正往 — 5 正知 — 6 正任 — 7 正恒 — 8 正親 — 9 正益 — 10 正弘 — 11 正謹 — 12 正備 — 13 正発 — 14 正守 — 15 正誼 — 16 正邦

初代正成は家康に仕えて勲功あり、下野国に二万石を賜った。その室お福は稲葉家を離縁後、徳川家に入り家光の乳母役となり春日局と称されて権勢をふるった。その実子二代正勝は寛永九年に相州小田原城主となり、八万五千石を領し老中職をつとめたが、安永十一年三十八歳で没した。その子三代正則は十二歳で家督をつぎ、明暦三年から延宝八年まで二十三年間老中職をつとめた。四代正往は小田原から越後国高田へ、さらに下総国佐倉へ移封された。その間元禄十四年中に任ぜられた。五代正知は享保八年五月朔日、山城国淀に移され十万二千石を領した。以来十六代正邦の時廢藩となるまで約百五十年間淀を領した。最後の藩主正邦は戊申の役の際は老中筆頭として江戸にあった。

稲葉家江戸藩邸は、上屋敷は小川町、中屋敷は築地木挽町、下屋敷は渋谷(九)にあった。この下屋敷は正勝以来の拝領屋敷で、その地域は頗る広大で邸内に田あり畑あり林あり炭焼小屋もあった。『名園雜記』、『渋谷御露地名勝記』によれば、奇石名木満ちて世に誇るべき名園であったが、維新後度々上地を命ぜられて、昭和初期には約一万坪を残すだけとなった。

### 稲葉正勝と和蘭使節

『平戸オランダ商館日記(一〇)』のうち、和蘭東印度總督特使として来日し江戸に行ったウイルレム・キンセンの日記(一六三一年五月〜一六三三年一月)をみると、閣老稲葉丹後守(二代正勝)の名前が屢々出てくる。幕閣に重きをなした正勝が蘭人の宿を尋ねたり、正式交渉の他に贈物を貰ったり、或は希望の品物を注文している。また商館長ニコラス・クーケバッケルの日記には、一六三三年十一月、稲葉丹後守は閣老でありかつ皇帝(將軍)の義弟と記し、さらに一六三四年五月には皇帝の義弟が死んだと記してある。

### 二 稲葉正則と蘭学

#### 永代日記

三代正則が寛永十一年に十二歳で家督をついでより、元禄九年に七十四歳で没するまでの約六十年間の公私にわたる文書をまとめたものを『永代日記(一一)』という。この中には和蘭商館長が江戸参府の際に必ず正則を訪問して種々の珍貴な品物を献納したことが記してある。

万治四年三月十三日(一二)の条に、先年献納をうけた薬酒十三色について、添付してある薬酒能毒書付をもらっているが、若し間違いがあつてはいけないので、弥次兵衛が持参してめすと申す外科に念を押して尋ねた結果次のような内容の返

事を得た。一、すとまかあ、一、あにいす、一、あるおい、一、めんで、一、ろうすさうわす、一、ふらんたびん、一、あんせりか、一、あくわひいたまでやうり等の薬酒について夫々適応・引用法・量・禁忌等を個条書に記し最後に、以上右之酒共根本は葡萄酒なり、色々加薬して煎夫々に名付申候作り様御望に御座候はゞ長崎より書付指上可申致候。

### 和蘭医学

十七世紀中葉、幕府高官や大名は西洋解剖書を求め、家臣に和蘭医学を習得させる傾向にあった。長年月幕閣にあった正則も解剖書を求め、和蘭医学に深い興味を示した。長崎オランダ商館の日記には老中稲葉美濃様 (Inaba Mino sama) として度々登場している。いま岩生の論文より引用する。

一六五〇年二月十日、夕方小田原城主老中稲葉美濃様が、外科医 (岩生注、Caspar Schanbergen か) を彼の城内に招いたが、腕に受けた傷口の診療を受けんがためであった。

一六六六年五月九日、本日町年寄新右衛門殿は再び長崎に出発した。これと同行して故ゾウアンの息子も同地に出発したが、美濃様の推薦によって長崎に於いて十年間オランダ人外科医について医術を習うためである。

この頃、大藩の藩医で君侯の命令によって出島に行き和蘭外科医について外科を学び、<sup>(一五)</sup> 医術免許状を授与されるのを例とした。現在 Diploma の残るのは西玄甫・嵐山甫安・瀬尾昌宅・太田黒玄淡・原三信の五者である。

一六六八年十二月二十三日、本日本木庄太夫が来て作右衛門の名に於いて (殿美濃様のために本年贈呈した物の外に) 古くからスピーヘルの解剖書 Spiegel der Anatomie を一冊持っているかどうか尋ねて、その殿は (これを買入れようとしているが) これについて色々尋ねさせたので、我々はこれを彼に手渡した…

一六七三年二月二十五日の条に、作右衛門の命によって老中美濃様のために、吉左衛門がホルツス・エクステンテヌス (Hortus Extentens) 三冊と『人体解剖図』Anatomic cosmographia 一冊を取りに来たが、彼の云う所によれば、平蔵殿

が江戸にこれを携へて行くであらう。

これらの記録をみると正則は三種類の解剖書を所有していたことがわかる。このうちレムメリン Johann Remmelin の解剖書 Pinax Microcosmographicus については本木庄大夫に翻譯を命じ、庄大夫は『和蘭全軀内外分合図』と名付けた訳抄本を作ったが、これは一部の和蘭医学伝習者の間に画きつがれた。酒井シヅ(一四)によれば現在秩父市の片山家にある写本の巻末に「本書通詞本木庄大夫差上之 天和二年四月中旬」と記してあるが、これは稲葉正則に差上げたものであらう。また一六七二年四月二十八日の条に、チヨーチツという美濃様の医師が、江戸出府中の商館長を尋ねて内外の情勢を尋ねた。また翌年四月十五日に同じチヨーチツがランセットを貰うために外科医の許にやってきた。この男はオランダ語をよくしたと。

このように稲葉正則は和蘭医学の優秀性を認めたらうで、数種の人体解剖書を入手して、これを通詞に翻譯させたのみでなく、自藩の藩医を江戸の和蘭人宿舎に尋ねさせ、また長崎に留学させて和蘭医学を学ばせた。さらに和蘭語をも学ばせた。このような風潮はたとえ封地は変わっても永く淀藩医学の底流となった。

『東インド会社遣使録』  
(一六六、一七)

蘭人 Arnoldus Montanus が一六六九年(寛政九年)に著わした『東インド会社遣使録』は翌一六七〇年 John Ogilby が英訳してロンドンで発行された。その中に稲葉美濃守への献納品の記事がでている。

商館長ワーヘナール(一八) Zacharias Wagenaar は一六五六年七月十一日バタバヤより長崎に向ったが、東印度会社代弁者より長崎に行く前の準備として、それぞれの人に献すべきまた希望品の品名を記した命令書を受けとった。稲葉侯については「小田原侯にして天文学者たる稲葉美濃様より白天鷲絨三片及優等の望遠鏡二個の希望あり」と記してある。さらにワーヘナールは第二回目の江戸参府のため一六五八年二月二日長崎を出帆した。三月二十一日江戸到着、四月九日將軍に謁

見したのも五月四日江戸を出立した。この間將軍・閣老に贈物をした。

『遣使録』(英文)<sup>(一六)</sup>の一節を次に記す。

Moreover, the Kings of *Onuarrri*, *Cunocuni*, and *Milo*, the Emperor's Uncle, and also the Councillor *Minosamma*, ask'd for some Strings of Blood-Coral, and six Cast of *Loopen*, the form of which was drawn on a piece of Paper, and given to *Wagenaar*. *Minosamma* requir'd also a Perspective-Glass, which being accordingly sent, was return'd again, the same being, as he pretended, too dark; but indeed the fault was in the bad Informations of his Servants, who knew not how to use it. And just so it was with the costly Book of Plants of *Rembert Dodoneus*; for although the Flowers, Trees, and Herbs were extraordinary handson to the Life, yet *Minosamma* sent it back again, because he look'd upon the Prints to be too small, and not wel drawn; so defining a bigger Book, and one that was handsomer painted. And as little was the Globe esteem'd, which with all the Art imaginable was made for the Emperor of *Japan in Amsterdam*, because they knew not the meaning thereof; yet some of them could find the chiefest Kingdoms in *Europe* upon it, and pointing to them with their Fingers, name them: But as for the representation of the Planets, they have many strange thoughts; for most of them think, that certainly such Men and Beasts do invisibly stick to the Clouds; others, that they inhabir the Heavens.

これを読むと、美濃様は贈られた望遠鏡を暗いといつて返還してきた。これはその家臣達が用法を知らなかったからである。これと同じくレムベルト・ドドネウスの植物書を贈ったが、書中の花卉植物の図が写生的で精巧であるにも拘らず美濃様はこれを返した。印画があまりに小さく、かつよく描かれていないといつて、大冊で美麗に描かれたものを請求した。…これによつてもその当時の日本の知識階級の理解度がうかがえる。

ドドネウス草木誌

稲葉家藩祖を祭る稲葉神社（淀本町、淀城跡公園内）には、『ドドネウス草木誌』<sup>(一九)</sup>一冊が保管されている。筆者は氏子会（旧淀藩士会）総代の立会のもとにこれを実視したが、その説明の前にこの草木誌の由来を述べる。

慶応の初年、藩賢明親館（現明親小学校の地）に医学を合併された際、藩庫より下げ渡されたもので、動・植物・理学等の科学書が完備していた。これらは正則への和蘭商館長よりの贈呈品で藩庫に保管されていたものという。明治初年、廃藩のさい藩賢も解散となったが、これらの科学書は藩医たちが抽籤によって希望書一部宛をいただいて持ち帰った。

この草木誌は鷹取養竹が持ち帰り、動物書（ヨンストンか）は藩医平野某が持ち帰った。

鷹取氏は京都市内で開業していたが、昭和初年に至り鷹取常任は上海に転居するに当り、これを稲葉神社に献納した。いまこれを見るに、表裏の表紙は薄い板に茶色の動物の皮がはりつけてあり、背には金具がはめてあるが破損が甚しい。大きさは縦四十四横二十六厚十二センチのフォリオ版である。

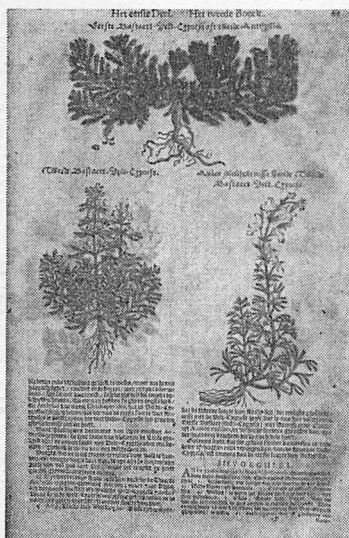


図 1 ドドネウス草木誌  
（稲葉神社所蔵）

一四九二頁、図は銅版手彩色で全文蘭語で書かれている（図一）。一六四四年アントワーペン版である。ドドネウスの肖像はついていない。京都には山本元夫氏（山本亡羊末孫）宅に、一五四四年発行の初版本『ドドネウス草木誌』<sup>(二〇)</sup>が秘蔵されている。その大きさは29×19のオクタボ八ツ折版である。

前項で述べた如くワーヘナールが献納した小版の草木誌は一旦返還されたが、後年改めてフォリオ版を贈呈して受納さ

れたもので、これが今日まで伝来したものと筆者は考える。

### 三 前野良澤と藩医宮田全澤

前野良澤は実父谷口新介が死んだ後、大叔父に当たる淀藩医宮田全澤に養われた。良澤が和蘭語学習をはじめた動機として、淀藩の坂江鷗の徳憑によるとされているが、宮田全澤の教育感化によるところが大きい。その教えに、「人といふ者



は、世に癯れんと思ふ芸能は習ひ置きて末々までも絶えざるやうにし、当時人のすててせぬことになりしをばこれをなし、世のために後にその事の残るやうにすべし」と教育した。

さて宮田全澤とはいかなる人物であったか。

これについては管見に入る淀藩史からは知ることができない。ただ関場不二彦の論説「宮田全澤が著、医学知津の解題」<sup>(二三)</sup>によって、その学識や思想を知るのみである。関場によれば『医学知津』は二冊より成り、延享元年春三月江戸の須原屋太兵衛が発行した。内容は（上篇）陰陽五行（下篇）気・血・精・神・虚・実・寒・熱・補・泻の十二弁より成り、全澤の医学思想を物語るものである。

その医説を要約すれば、『素問』・『靈枢』の主張や陰陽五行の説は、匣外の学（形而上、道、精神界）ではあるが、治

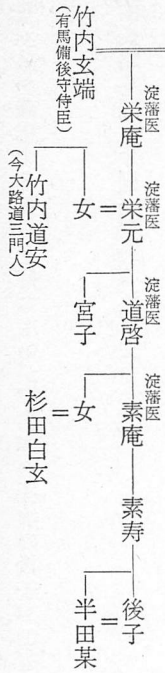


療に裨益する所は少い。治病の学を以て圈内の学（形而下・具体的の学・医学もふくむ）として真理を究めんとする。真理は独り明徹に解釈せらるる実験を基本とする研究によって得られるものであると説いている。当時の学派からいえば、香川修庵の儒医一本派ないしは吉益東洞の万病一毒派等の古方派に組するものであり、高く一世を睥睨して慨嘆するところがある。このように卓絶した思想の持主が淀藩医の中にあつて、良澤の人格形成に影響を与えると同時に家中一般にも影響を及ぼしたものと考へる。

#### 四 杉田家と藩医平野家

前述した如く淀藩費廃校の際に、動物図説を持ち帰った藩医平野氏については、『今世医家人名録』（文政三庚辰）に青山原宿下邸 本 山城淀 平野素庵とでている。後述するが平野家は杉田家と姻戚関係にある。いま平野家親族書<sup>(二四)</sup>（寛保元年平野与兵衛）等により、筆者は平野家の系譜を作つてみた。

#### 平野家略系図

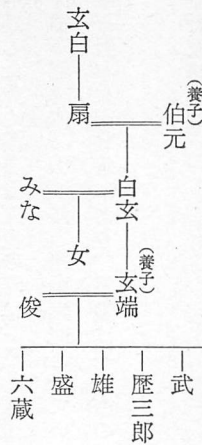


道啓の妹宮子は八代藩主正親の五男正春に見出されて、その側室となり留次郎をもうけた。留次郎は八歳時、石川家に養子に迎えられたが、その際宮子も石川家に移つた。留次郎は石川兵庫と改名し四千石の旗本寄合衆となり、また悟堂と

稱し書画をよくし文人と交流した。松浦静山も度々来遊した。『甲子夜話』<sup>(二五)</sup>巻一には「石川兵庫の生母三也子の事」と題して、宮子の貞操温順・婦徳すぐれ文芸の才豊かなことを称賛している。

次に平野家より<sup>(二六二七)</sup>杉田家に嫁したのは、素庵の妹であり、玄白の孫の白玄に嫁した「みな」であろうと思う。しかし筆者は杉田家々系を確認する資料を持たないが、素庵の孫娘の後子が田辺密蔵にあてた書翰<sup>(二八)</sup>(昭和五年八月十日)を掲載する。

杉田氏略系図(片桐一男著『杉田玄白』)



(前略)……なほ御尋ねの杉田との関係につきてハ別に深きいはれも無くたゞ偶然の事のやうに承り申候。祖父より父への遺言中に「杉田ハ縁家なれば就きて蘭学を学習せよ」と申しおきのふし思出候。祖父は終日筆を持ちし人の由にて父の幼少の頃の日記など御座候に付さがし出し候て調べ可申候。杉田も只今ハ伯母のかしづき候白玄と申す人の孫の代にあたり、長ハ没し仲ハ医師季ハ高商出にて会社の重役を致居候。其の内参り候て何か御材料のはしなりともきき出し候など存候。古き蘭語の動物学ハ平野の家に保存致し居候。大分損じたれど大震災の際も御座候よしどこかへ寄附致度など存居る事に御座候、嘗て人だのみに候へど外国語学校長之某と申す方ハ数ヶ国の語にくはしき由にて見てもらひ候へ

ど蘭語のやうなれどよくわからぬと申す事に御座候。いつ頃の出版のものにやなどとあやしくふしぎなる動物拝見致し候。(後略)

この手紙の筆跡文面をみても、後子の教養の深さがわかる。晩婚で半田某に嫁し、生まれた男子に平野姓をつがせた。当時の住所は東京府北多摩郡狹江村岩戸一二七五であった。

なお『ヨンストン動物図説』のその後の行方はわからない。

## 五 藩医南小柿寧一

呉秀三は昭和四年、『中外医事新報』誌上に「我国漢方医及び蘭方医の最初の解剖に関する読史余談<sup>(二九)</sup>」なる論説を発表したが、『解剖存真図』の作者南小柿寧一に関しては、「淀の藩医、文政二年までに四十余屍を解剖した」と記してあるだけで、それ以上の記述はない。しかし呉は寧一の家系・履歴・子孫等を明らかにしたい強い希望をもっていた。そこで昭和

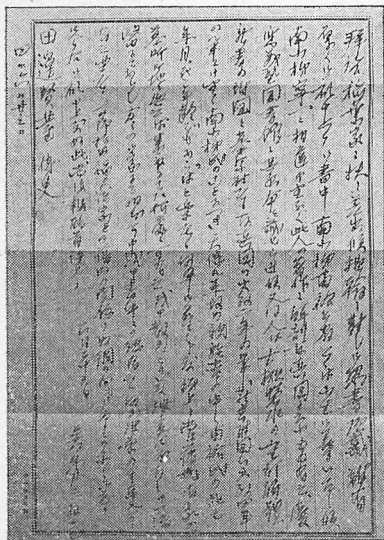


図2 呉秀三より田辺密蔵宛書翰

四年六月、稲葉家々扶大野重昭に、南小柿寧一の履歴等に関する質問の書翰を送った。それを大野から受けとった淀在住の田辺密蔵は、以後二年間、可能な限りの手段を講じて南小柿の家史解明につとめ、それを逐一呉に報告した。呉はその労を多としたが、その結果は学会誌にはついに発表されなかった。しかし田辺密蔵はその一部を『温故会報告』第五・六号<sup>(二二〇)</sup>に掲載した。幸い未発表分も含め南小柿家に関する資料は、現在田辺陸夫が所蔵している。筆者は今回その資料のすべてを調査させて頂いたが、その中には呉の書翰七通(図2)および南小柿家文書の写

しなど多くを含んでいる。今回紙数の関係上、本論文中には掲載しないで、別の機会に資料編として発表することとし、これらの資料を総括して筆者が作成した南小柿家の小史を次に記す。

南小柿家<sup>みながき</sup>

初代 斎藤官左衛門が寛保二年稲葉正益に初めて勤仕した。実子なし。

二代 南小柿要仙。桑名松平家の臣、竹沢喜左衛門の子、官左衛門の養子となる。天明八年御番医師を命ぜらる。安永九年南小柿と改姓す。隠居後黙仙と称す。

三代 南小柿寧一。要仙の実子、幼名芳太郎字清人・号西崖・甫裕と称す。寛政十一年十五歳で家督を継ぐ、日本橋西に住み幼時より桂川甫周に入門し、外科を修め、兼ねて天文輿地の学を受く。画才あり父方の伯父竹沢養浜に画を学ぶ。文政二年自己の解剖例四十余体に、西洋解剖書数種を参考にして『解剖存真図』<sup>(三二)</sup>一卷を作った。文化八年一月石高五十石であったが、度々加俸をうけて文政六年十二月には石高百三十石に達した。文政八年三月七日四十一歳で没し善久寺に葬られた。『重訂解体新書』の附図を画いたが実際には用いられなかった。寧一没時、遺族は妻と五歳の娘一人、隠居黙仙のみであり、後嗣の決まるまで捨扶持を受けた。

四代 南小柿宗宅。母方の相田家より入って天保二年一月九日甫裕の名跡を相続し、十三人扶持を賜わり家を再興した。桂川甫賢の門に入り弘化二年三月一日、師より甫の字を許されて甫裕と称す。慶応二年死去。

五代 南小柿宗宅。「慶応二寅年五月七日跡目相続、高七十石、同年同月十七日番医申合可相動旨申付之」(淀藩分限帳)。維新後は洲吾と改名して横浜に移り、へボンらと交流した。日本基督教会横浜指路教会牧師となる。のち東京に移り、大正七年一月没。

六代 南小柿四郎、洲吾の末子、昭和五年頃京都市左京区下鴨芝本町五三に住んだ。田辺密蔵は同家を訪れて同家文書を採録した。

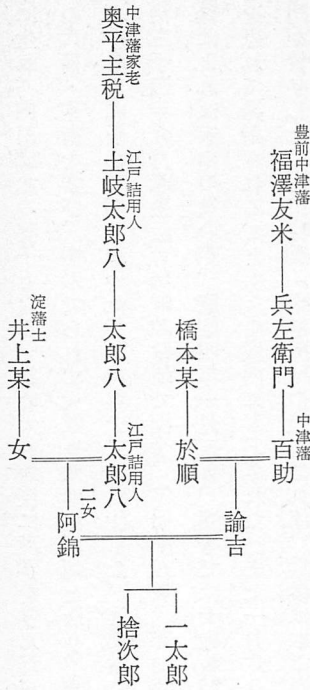
七代 南小柿正光。現在東京在住。

菩提寺は築地本願寺内善久寺であったが、震災後同寺は東京府南足立郡伊興松字狭間耕地に移転した。なお五代宗宅以降の家系については、石原力の御教示によるところが大きい。

六 福澤諭吉と藩士井上家

両家は姻戚関係にあったといわれるが、井上家については管見に入らないので、『福澤諭吉撰集』<sup>(三二)</sup>より両家の関係を図記する。

福澤家と井上家



## 七 藩士内田平学と和蘭砲術

(三三四)  
内田家は代々武をもつて稲葉家に仕えた。兵学は諱成章、維新後春帆と改めた。淀藩士飯倉光貞の次男として文政丁亥十年に生れ、内田成允の養子となる。初め大槻磐溪に漢学を学んだが、藩公の命により江川英竜（太郎左衛門）について泰西の兵術・砲術を学び、擢んでられて大隊長兼陣法師範となり、家老格を以て遇せられ、禄三百五十石を賜う。明治三年淀藩少参事に任し軍制を掌ったが、同年十二月致仕した。兵部省に登用されるも就かず。

明治三十四年九月麻生飯倉伝町四番地で没す、年七十五歳、青山共同墓地に葬る。

記録によれば戊申(一五七)の役の際、慶応四年一月三日、淀藩では大砲数門を伏見堤に引き出して戦闘に備えたが、朝敵となることを恐れて発射されることもなく城内にもどされた。また一月六日長洲藩に野砲七門を貸しまた西郷隆盛の乞により大砲二門を貸与した。内田吟風（平学孫）の談によれば、兵学は木津川の大橋下流の河原で砲術訓練や歩兵訓練を行ったなど多くの逸話が残っている。

## むすび

稲葉家淀藩の蘭学に関するいくつかの事跡について述べてきた。残念ながらそれは師弟相伝のような系統的な蘭学の流派を形成するものではなかった。ただし藩中の底流として早期より蘭学に対する強い理解と憧憬が流れていたように思う。それは何によつてもたらされたか。

一つには藩主正勝、正則が幕閣にあって、和蘭人と頻繁に交流した結果、医学・天文学等科学全般に興味をいだき、また世界状勢にも明るかったことによる。他面、国許の淀は内陸にあるとはいえ、淀川を通して都の外港としての役割を果たしてきた。参勤交替の大名も和蘭商館長も、また十二回に及んだ朝鮮通信使も、淀で船を乗降した。この事も海外情勢や

西洋の学問を理解する文化的風土を醸成した。

例えば南小柿寧一の畢世の業績である『解剖存真図』の生まれた背景について考えてみよう。三代正則は自身で和蘭人医師の治療をうけて、その優秀性を認めるや、家臣を長崎に派遣して和蘭語や医学を学ばせた。さらにスピゲルやレンメリンの解剖書を注文して入手し、これを通詞に翻訳させた。正則のこのような蘭学への積極性は、稲葉藩全体に和蘭医学への認識を深める結果となり、それは一つの底流となって後年『解剖存真図』として結実した。

今一つ想を逞しくするならば、伊良子光頭が山脇東洋に次いで解剖を行い、また小石元俊が平次郎解剖を行った伏水刑場は、淀城から宇治川北岸の堤（伏見堤）を遡ること僅に一里（四料）の近距離にあった。藩公に従って国許に帰った寧一は、いやでも光頭や元俊の解剖の事跡を想起して、おおいに刺激を受けたと思われる。『解剖存真図』には『平次郎蔵図』との比較が意識的に強調されているように思う。

寧一の石高は二十七歳の時、僅に五十石であったが、数年毎に二、三十石ずつの加俸をうけて、三十九歳時には百三十石に達した事実をみても、藩財政窮乏時にもかかわらず、淀藩がいかに学問重視の姿勢をもちつづけていたかがわかる。

淀藩は山城国（京都市）における唯一の大名領であった。そこには皇都における有名蘭学者とは異なった蘭学の流れがあった。

稿を終るに当り、基礎資料の閲覧に便宜を計っていたいただいた淀温故会の田辺陸夫氏と成田村夫氏。内田兵学末裔の内田吟風氏。種々御教示いただいた日本医史学会酒井シヅ博士と石原力博士。またモントヌス使節記原書閲覧を許可していただいた京都外国語大学図書館関係各位。以上の諸氏に対し深甚の謝意をささげます。

本論文の要旨は昭和六十二年十二月、日本医史学会例会（於順天堂大学）において口演した。

- (一) 京都府医師会編『京都の医学史』昭五十五  
 (二) 山田重正「山城淀藩の医学」『啓迪』一号昭五十八  
 (三) 杉立義一「淀藩医竹岡家について」『啓迪』六号、昭六十三  
 (四) 杉立義一「鉄牛禪師賛岡本玄治画像について」『漢方の臨床』三四卷一二号、昭六十二  
 (五) 田辺密蔵編『漢城温故会報告』田辺家は世々稲葉藩の筆頭家老として、幕末まで淀藩に重きをなした。密蔵は海軍士官を退役後、淀藩歴史の解明記録を意図し、大正十五年より漢城温故会を主宰し、『漢城温故会報告』(大正十五年第一回より昭和十四年第一四回まで)を発行した。以後『報告』と略す。昭和十四年密蔵没後その資料・古文書は甥の田辺陸夫が保管している。  
 (六) 田辺密蔵『淀城に就いて』第一一回『報告』昭十一  
 (七) 境幸政『山城淀城』昭四十一  
 (八) 『寛政重修諸家譜』第十、昭五十九  
 (九) 田辺密蔵『渋谷御下屋敷の名勝に就いて』第一三回『報告』、昭十三  
 (一〇) 永積洋子『平戸オランダ商館の日記』第二輯、一九六九年  
 (一一) 『永代日記』原本は稲葉神社の所蔵であり、マイクロフィルムは国立国文学研究資料館史料館(東京都品川区豊町一ノ一六ノ一〇)に保管されている。  
 (一二) 田辺密蔵「江戸初期より我藩には隠然蘭学の流ありしにあらざやとの疑問に就て、附南小柿寧一の事蹟」第五回『報告』、昭五  
 (一三) 岩生成一「オランダ史料から見た江戸初期西洋医学の発達」『日本学士院紀要』二六卷三号、昭四十三  
 (一四) 小川鼎三・酒井シヅ『解体新書』出版以前の西洋医学の受容』『日本学士院紀要』三五卷三号、昭五十三  
 (一五) 杉立義一「太田黒玄淡の和蘭医術免許状」『蘭学資料研究会研究報告』三〇九号、昭五十一  
 (一六) Arnoldus MONTANUS, "Remarkable Addresses by way of Embassy from the East-India Company of the United Provinces, to the Emperor of Japan." Englished by John OGILBY London, 1670  
 (一七) 和田萬吉訳『モンタヌス日本誌』六十四



- (一〇) 永積洋子『ワーヘナール、洋学史事典』昭五十九
- (一一) 上野益三「博物学史散步(ハ)ライデン」『植物と文化』八号、昭四十八
- (一二) 上野益三「山本亡羊遺愛」ドドネウス草木誌』『植物と文化』一二号、昭五十
- (一三) 杉田玄白『蘭学事始』岩波文庫 昭五十
- (一四) 「前野家系図」『中外医事新報』一二〇七号、昭九
- (一五) 関場不二彦「宮田全澤が著医学知津の解題」『中外医事新報』一二二六号、昭十
- (一六) 半田後「平野宮子の事蹟に就て」第五回『報告』、昭五
- (一七) 松浦静山『甲子夜話』I 昭五十二
- (一八) 片桐一夫『杉田玄白』昭四十六
- (一九) 「杉田玄白の家系」『日本医史学雑誌』八卷三・四号、昭三十三
- (二〇) 半田後より田辺密蔵宛書翰 田辺陸夫蔵
- (二一) 吳秀三「我邦漢方医及び蘭方医の最初の解剖に関する読史余談(一一八)」『中外医事新報』一一四三号、一一五四号、昭四
- (二二) 田辺密蔵「南小柿寧一事跡補遺」第六回『報告』、昭六
- (二三) 小川鼎三「明治前日本解剖学史」『明治前日本医学史』昭三十五
- (二四) 「福澤論吉子女之伝」『福澤論吉撰集』第十卷、昭五十八
- (二五) 田辺密蔵「我藩文武制度の一斑と其首脳者に就て」第一一回『報告』、昭十一
- (二六) 内田家々系図 内田吟風所蔵
- (二七) 田辺密蔵「戊辰に於ける淀城」第一四回『報告』、昭和十四

(京都府京都市)

## Development of Dutch study (*Rangaku*) in the Yodo feudal clan.

by Yoshikazu SUGITATSU

While a cabinet member from 1657 to 1680, Masanori Inaba (the 3rd lord of the Inaba family) became acquainted with the managers of the Deshima factory. He obtained several Dutch textbooks on natural science and anatomy from them, and ordered their translation into Japanese.

Under the academic influence of lord Masanori, Dutch study was greatly spread in the Yodo clan. One of the results is "Kaibosonshinzu" described in 1819 by Neiitsu Minamigaki, a surgeon belonging to the Yodo clan, which is well known to be a valuable anatomical scroll.

Today, at the Inaba shrine, we can still see "Dodonaeus's Herbal" published in Antwerp in 1644, which was presented to Masanori by Wagenaer in 1659 and handed down within the Inaba family.